



心内語

昨日の古文の授業を思い出してみよう。心内語を見つける練習をしたが、その際、教科書の最後の段落を話題にして、その部分が教科書であるにもかかわらず、間違っていることを指摘した。再度引用してみよう。

*

あはれなる人を見つけるかな。かかれば、この好き者どもは、かかる歩きをのみして、よく、さるまじき人をも見つけるなりけり。たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見るよと、をかしう思す。さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばやと思ふ心、深うつきぬ。

*

今ではどこが間違っているか、明確に分かるだろう（分かるだろうな…と脅す）。波線をつけた二つの引用の「と」に注目すると、最初の「と」は冒頭の「あはれなる人を～」から「～見るよ」までを受け、二つ目の「と」は、前の部分に続く「さても、～」から「～見ばや」までを受けることが何となく感じられるはずである。

それを文法的に確認すると、最初の心内語の部分では

①一文目の「あはれなる人を見つけるかな。」では、「見つけるかな」の「かな」が終助詞で、これを発言している人の心情が直接表明されている印象がある。

②続く二文目の「かかれば、～見つけるなりけり。」では、文末の「けり」が「なりけり」の形になっており、「詠嘆」（永ちゃん！）の意であることが分かるから、ここも発言者の心情が直接表明されている印象がある。

③そして、三文目「たまさかに～見るよ」を引用の「と」が受けている。（「よ」も終助詞）ということになり、「あはれなる～」からが心内語であると納得できるだろう。

二つ目の引用では、

①一文目の「さても、～児かな、」では、「かな」が終助詞。

②二文目の「何人ならむ、」は、形の上では判断が難しいが、文末の印象。

③そして、三文目「かの人の～見ばや」では「ばや」が終助詞。

というわけで、ここも「さても、～見ばや」が心内語と考えることができる。

以上を踏まえると、「と」から遡って心内語の範囲を決めるためには、左欄引用部分で下線を施した「。」は「、」になっていなければいけないことが分かるだろう。

*

古文が難しい大きな理由の一つは、主語が文の途中で分からなくなり、話の内容がつかめなくなるからである。だから、古文の勉強はひとえに「主語の追究」ということになり、その際、敬語が大きなヒントになるという話をしてきたわけだ。しかし、地の文と、「」がついた会話文・心内語の中とでは、敬語の使われ方が違って来る。だから、「」が最初からついている会話文はともかくとして、「」がついていない心内語については、引用の「と」を目安にしてそれを見つけてやらないと、判断を誤ることになるのである。

というわけで、難しい授業だったかも知れないが、大変重要な授業であったことがご理解いただけたらだろうか。